

世話役の山本橋治氏（同）および運営委員各位のご尽力の甲斐あって赤字を出すことなく、極めて好評のうち実施された。

第2回（平成4年度）は、前年度運営委員会のたびに、常任理事としての立場から、赤字を出さぬように細かい点までうるさく注文を付けたことが、当セミナーの運営に熱心だと誤解されたようで、運営委員長のお鉢が筆者に回ってきてしまい、幹事大谷泰夫氏（住金）、世話役の岩永祐治氏（同）のもとに前年度のテーマ（1）～（3）にテーマ（4）を加えて実施された。当年度も、頗る好評で全国各地から参加して頂いた。お陰でかなりの繰越金を得ることができたので、次年度以降のセミナーのテーマの選定や企画にあたって、赤字を余り心配することなく、少し思い切った企画ができるようになったと運営委員一同胸を撫で下ろすとともに、新しい企画・運営に意欲を燃やしている。

〔実施セミナーのテーマ〕（敬称略）

- （1） X線回折：粉末X線回折法による相の同定と残留応力測定
の原理と実際
講師：田中啓介（名大）、板谷忠夫、小木曾克彦、佐々木勝成（理学電機）
- （2） 化学的評価・金属の腐食と電析の基礎
講師：山川宏二（大阪府大）、工藤赳夫（住金）
- （3） 組織観察：走査電子顕微鏡による破面観察とその解析
講師：駒井謙次郎（京大）、城野政弘（阪大）
- （4） 表面分析：表面・界面、微小分析—その測定原理と評価・解析技術—
講師：深町正利（金材技研）、神野正文、小野清弘、田辺道穂（島津製作所）

随 想

支部活動の思い出

盛 利貞

（京都大学名誉教授、産業技術短期大学名誉教授）

日本鉄鋼協会に筆者が入会したのは昭和17年1月で、京大工学部冶金学科在学中でした。紹介者として沢村宏先生の署名をいただいたと思います。

当時図書室の司書係の手元に昭和14年4月に東京で開催された鉄鋼協会第21回講演大会の前刷が何冊も保管されており、この前刷には協会への入会申込用紙が綴じ込まれていました。名誉教授の斎藤大吉先生は昭和13年4月から15年3月まで鉄鋼協会会長でしたが、関西支部設立に努力されて昭和14年3月に支部は発足しています。さらに支部会員増をはかるため、当時冶金学第1講座担任の沢村宏先生と連携して支部の会員増加に尽力しておられたため、図書室に入会申込用紙を常備して学生に対する入会のPRが計られていたようです。

筆者が入会した当時の准会員の年会費は入会金込みで8円80銭でした。学生会員が定款に設けられたのは昭和23年9月以降のことで、入会当時は正会員より准会員の人数が会員の過半数を占めていました。なお当時の学卒技術者の初任給月額50～60円に比較して、年会費は割高であったためか分納が可能でした。

大学在学中に支部例会に出席した記憶は1度あり、それは昭和17年7月に大阪で開催された第17回例会講演会でした。沢村

（5） Xα法（分子軌道法計算実習）（予定）

第3回（平成5年度）は、運営委員長佐分利敏雄教授（阪大工）、幹事広瀬裕輔氏（日新）のもとで、さらにコンピュータ実習を伴うテーマ（5）Xα法（担当：足立裕彦教授・京大）を追加して実施される予定である。

毎年、全セミナー終了後、運営委員会を開催し、参加者からの感想アンケートをもとに当年度の反省と次年度の計画について議論するが、「2日間コースにして欲しい」という希望が30～50%もあり、また「参加者が持参した試料を実習に使うに欲しい」等々、積極的な要望が多いが、講義だけでなく実習を伴うセミナーでは、時間、場所、協力者（機関）を得ることが大きな問題であるため、安い経費で如何に充実したものにするか苦慮しているのが現状である。

大好評のうちに当セミナーを運営できているのは、宣伝・案内にご協力頂いている日本鉄鋼協会および日本金属学会や当運営委員各位は勿論のこと、実際に現場でお世話して頂いている講師の方々、幹事、世話役、各セミナー担当運営委員、セミナー開催場所の方々の献身的なご尽力に負うところが極めて大きい。「材料評価セミナー」は、ボランティアに支えられたまだ生まれたばかりの新しい試みである。折しも世の中には、不景気風が吹き荒れ、多くのセミナーや講習会への参加を見合わせる風潮が漲っているが、若い技術者の貴重な学習・実習の場として、ベテラン技術者のリフレッシュ教育の場として、「材料評価セミナー」を主催者側と参加者側の両面から皆の力で大きく育てて頂きたい。また、セミナーを良くするためのご意見やご提案は遠慮なく運営委員会に頂戴したい。

先生が「溶銑を原料として低磷銑を製造する方法に関する研究」と題して講演され、「シェンクという人が云々……」とアーヘン工科大学のH. Schenckの研究論文に何回も触れておられたことは今も記憶しています。

昭和17年9月大学卒業と同時に軍務に服しましたので、戦時中は協会の行事に出席したことはありません。ただし会費は母親が留守宅で払込んでくれましたので会誌は戦中戦後を通じ、継続して入手していました。ただし会誌のうち第30年（昭和19年）10～12号および第31年（昭和20年）1～12号は休刊ですから勿論持合せません。

戦時中ドイツで刊行された学術技術情報資料はドイツの潜水艦によってある程度我が国に輸送されましたので入手できたようですが、米国・英国等の旧連合国側の学術雑誌は開戦とともに入手できなくなり、戦後も1～2年間は戦前のように容易に入手することは困難でした。

大学の研究者や企業の技術者が、戦後外国文献の情報を相互に交換し合い、文献をコピーして個人的に討論するようになったのはおよそこの頃であります。一方鉄鋼協会および金属学会の両関西支部は他地区の支部と同様に戦後本部補助金がきわめて僅少となり実質上ほとんど活動できない状態にあったようです。しかし支部会員中には研究意欲が旺盛ですべて自弁で会合し、関係論文の検討、新文献の紹介、研究相談などの活動を始めようという気運が高まり、戦後はじめて「鉄と鋼」誌および金属学会誌に関西支部会員の研究会活動が会告として掲載されたのが昭和23年7月のことで、この会合が「物理冶金談話会」であります。「鉄と鋼」誌はこの号すなわち第34年7号で、戦後

10カ月前後の月遅れでかつ合併号として発行されていた会誌の発行年月が暦年の年月に追いついていますが、支部の特色である研究会活動の会告が丁度同じ時期となっています。

このような月遅れの合併号の会誌には支部関係の会告は全く見当たりません。関西支部におきましても昭和27年頃までは活発な活動は困難であったと思われますが、関係資料が見当たらず詳細は不明であります。

さて昭和27年関西支部長であった沢村先生は、当時金属学会関西支部長であった斎藤省三先生（浪速大学）はじめ両支部の主な役員諸氏と下相談された結果と推定されますが、昭和27年3月に大阪府工業奨励館において第1回両支部連合理事会を開催して連合後の支部活動実施方針を協議し、その結果「関西支部の諸事業は全面的に両支部協同のもとに行う」という基本方針が決められました。そして同年5月に開催された連合臨時総会に続く講演会（大阪大学）および見学会（造幣庁工場）が両支部合同の最初の月例行事であります。

ところで昭和28年の鉄鋼協会第46回秋季講演大会が京都で開催されることになり、その実施計画について大会実行準備委員会が大阪府工業奨励館で開催されました。筆者はこの会合に出席しましたが、当日の議事録が見当たらないため正確な開催月日は遺憾ながら判明しません。しかし会議の内容は強く印象に残っておりまして講演大会開催のための予算20万円は地区の関連企業に寄附をお願いすることになりましたが、支部活動のための募金を併せて実施することが合意されました。

募金によって約100万円の基金が得られ、一挙に活発な支部活動が昭和29年頃から開始されました。しかしながらこの基金も昭和32年頃には底をつくと予測されたため、同年に開催された役員会で関西支部連合五周年記念募金を計画し、広田寿一氏を実行委員長とする募金を実施し、同年度末までに約190万円の剰金が得られ、活発な支部例会および研究会活動が引き続き行われて現在に至っています。

昭和33年度以降は関連企業に対する前記のような募金も行われていません。

ただし会員の個人寄附金の募集は昭和14年の支部設立当初から毎年行われており、戦後も引き続いて昭和43年度まで毎年実施されましたが、その金額は昭和14～16年および昭和30、31年度は支部収入年額の27±1％、昭和32～43年の間は10±3％でありまして、支部会員個人としても積極的に支部活動に協力してきたと言わねばなりません。

関西支部活動の特色となっている研究会活動のうちで、筆者が参加していたのは関西鉄鋼技術研究会であります。この研究会は学振製鋼第19委員会を支援する内容の研究会活動が実施されていました。この会の名称はその後3度改称され、現在は鉄

鋼プロセス研究会となっています。

なお他の研究会の活動状況については他の執筆者が後述の小史出版のさいに記述される予定です。

つぎに常任理事について述べますと、常任理事の制度が支部規則に設けられた年月は資料が見当たらず不明ですが、筆者は2度常任理事を経験しました。2度とも村上陽太郎先生とのペアでした。

月例会の案内状、理事会、評議員会、総会等の議事録の印刷、郵送事務などを昭和45年度から鉄鋼短大（現産業技術短大）事務局に委託して以降は、常任理事の手間がかなり軽減されましたが、それ以前は原稿の作成から印刷の宛名書き、発送まで一切の手間は常任理事が引受けていましたので、例会案内の郵便物発送の前数日間は研究室のスタッフのみならず配属学生全員に手伝ってもらわないと処理できませんでした。宛名印刷用のプリンターもなく事務費（人件費）が年間予算の5％以下であった頃は、常任理事の研究室はそれはそれは大変でした。例えば筆者が常任理事を務めた昭和40年度は理事会年12回、評議員会4回、総会1回、講演会または講習会6回、見学会6回でありました。

ところで同年度の第8回理事会を京大冶金学教室で夕刻から開催し、8月16日の京都五山の送り火を觀賞していただくことにしました。教室の建物屋上から大文字、妙法、船、左大文字に鳥居がすべて展望できるからです。夕食後出席の理事の方々に送り火を存分に眺めていただけたと喜んでいましたところ、帰宅後猛烈な下痢腹痛を起こして寝込んでしまいました。夕食の幕の内弁当による食中毒を起こしたのです。他の理事の方はどうであったか問合わせましたところ、出席者20名中T理事1名を除き19名が同様に食中毒症状で、大変なご迷惑をおかけしてしまいました。以後夏の太文字焼き觀賞を支部役員会に組み込むことは差し控えることにしました。

つぎに秋季講演大会については、昭和56年11月の第102回講演大会が京都で開催されました折にたまたま当時の関西支部長ゆえ実行委員長を委嘱されました。会場が鉄鋼協会は京都府中小企業会館、金属学会は京都工業会館と友禅福祉会館の3カ所に分れ、出席会員の皆様に少なからず御不便をかけてしまいました。京都大学は教養部（現総合人間学部）と本部地区の学部との秋の休講期間がずれているため、3日間同じ時期に多数の講義室を使用することができなかったのです。最近の京大の学内事情はどうなっているのでしょうか？

最後に当支部では、現在支部小史委員会が鉄鋼協会関西支部の過去54年間の記録と、金属学会関西支部の設立以来52年間の記録とを整理し出版する作業が進行中であることをお伝えして本稿思い出の締め括りいたします。



『幻の千草鋼』を訪ねて

姫田 昌孝

（新日本製鐵㈱広畑製鐵所）

中国山脈に連なる1千メートル級の山々に囲まれた千種町。面積の9割を山林が占め、人々の暮らしもこの自然と共に連綿と息づいてきた。中国自動車道の山崎インターを降り、国道29号線を400メートルばかり北進し、左折して県道にはいるとその

まま千種町になる。又、姫路からは29号線を北上して約1時間20分の距離にある。日本屈指のタタラ製鉄「千草鋼」は此の地に誕生した。現在は恵まれた大自然の中にテニス、ゴルフ、フィッシング、パラグライダー、スキー等四季を通じて楽しめる関西地区の高原リゾートとして人気急上昇中の町でもある。

さて、製鉄技術は兵庫県下から岡山あるいは出雲へ発展したものと推定されるが、千種の製鉄が史書に表れるのは奈良時代に進められた地誌「播磨風土記」：713～716：であるその風土記の「矢禾の郡」を見ると